

ハイデ

(第二十八回)

津田芳雄譯

ペーテルは、もう恐ろしくつて、石のやうに立ちすくんでしまつた。今日いちんちの數々の出來事の揚句なので、精も根も盡き果てて、ただ「もう駄目だ」と思ふばかりだつた。髪は一本一本逆立ち、眞蒼な顔は怖ろしさにひきゆがんだまま、樅の木の後から出て來た。

「さあ、元氣を出して」

おばあさまは、ペーテルが羞づかしさで固くなつてゐるのださばかり思ひ込んで、早く打ち解けさせてやらうと氣を使ひながら、云つた。

「ね、遠慮しないで仰しやい、あれは、あなたがしたのでせう？」

ペーテルはもう、目も上げられないで、おばあさまが指してゐるものも、見もしなかつた。それ

でも、小屋の曲り角のまゝころでは、おぢいさんが灰色の眼を光らせて自分を見据え、その横には、誰よりも怖ろしいフランクフルトのお巡りさんがひかえてゐることを、よく知つてゐた。手足をがたがた震はせ、肩をぶるぶるさせながら、低い聲で呟いた。

「はい」

「さう。だけさ、さうしてそんなに怖がつてるの」

「だつて——だつて——すっかり粉みぢんになつちまつて、もうくつつけられやしないんだもの」
聲もしきろに、膝はがくがくさ震へ、立つてゐるのもせいぜいだつた。

おばあさまは、おぢいさんのそばへ行つて、

「可哀さうに、あの子は少し氣がへんなのぢやないでせうか」

「不憫さうにたづねた。」

「いやいや」

おぢいさんは受け合ふやうに、

「椅子を吹き飛ばした風さいふのは、實はあのぢぢやつたのですわい。それで、うんま置ききをされるものと思つて居りますのぢや」

「云つた。おばあさまは、信じられない氣がした。見たところ、ペーテルはそんなにわるい子供なのやうでもなく、まして椅子のやうに是非とも要るものを、わざわざこわさねばならないやうな理由なき、ある筈がないと思へるのである。でもおぢいさんは、はじめから怪しいと睨んでゐたことを口に出しただけの話で、クララを見るペーテルのうらめしさうな眼付きや、そのほか数々の仕打ちを思ひ合はせれば、いかにもペーテルのやりさうなこゝなので、おぢいさんは確信をもつてきつぱり云つてのけたのだつた。けれども、おばあさまは熱心に諫めはじめた。」

「いいえ、いいえ、お仕置きはもうよござんすよ。あの子の身にもなつてやれば、無理もないの

ですよ。わたしたち大勢で、フランクフルトからやつて来て、みんなしてあの子のたつた一人の遊び相手の大事のハイディをまつてしまつたのですものねえ。長い間、ひきりぼつちにされて、毎日憤慨してたのですよ。たうさう腹立ちまぎれに、仕返しをしたのでせう——もちろんそれは、馬鹿なこゝには違ひないのですけれど、でもわたしたちだつて、腹立ちまぎれになら、する分馬鹿なこゝもし兼ねないのでせうからね」

さう云つて、まだ震へてゐるペーテルのそばへもぎり、椀の木の下の腰掛けにかけて、やさしく呼びかけた。

「ここへいらつしやい。少しお話ししたいこゝがあるのですから、さう震へてゐないで、わたしの前へ来て、ちゃんま立つてごらんなさい。あなたは椅子をつき落して、めちやめちやにこわしてしまひましたね。それは大變よくないこゝで、あなたもよく思ひ知つたでせう。お仕置きを受けねばならないこゝも、ちゃんま知つてゐますね。だからそれを逃れようとして、一生懸命に隠さうしてゐますね。でも、ここが肝心なのですよ、ペーテル。わるいこゝをしておいて、誰にも知れない

ご考へるのは、間違ひです。神様は何でも見、何でも聞いていらつしやるのです。わるいごころをしめた人が、それを隠さうとするに、神様は、わたしたちが生まれた時からわたしたちの中へ住まはせてお置きになつた小さな番人をお起しになります。平生はその番人は眠らせてあるのですが、わたしたちがわるいごころをすれば、すぐに針を取つてわたしたちを刺しはじめ、一刻も體を休ませてくれません。『今に見付かるぞ、曳き出されて仕置きをされるぞ!』と、しよつちう突つ付くので、こわくて心配でたまらないのです。あなたも近頃、そんな氣持がしませんでしたか? ペートル」

ペートルは、おばあさまに自分の心をつくりそのままに云ひ當てられて、如何にも實感をこめて後悔のしるしになつた。

「それから、あなたはもう一つ思ひ違ひをしてるますよ。ひごにわるいごころをしてやらうと思つたごころが、却つて常人には、なによりの仕合せになつたさいふごころです。クララは椅子がなくなつたけれど、さうしてもお花がみたかつたので、歩くおけいごをはじめ、それから毎日だんだん上手に歩けるやうになりました。このままずつごころ

にゐれば、寢椅子があつた時よりも、もつご何度もお山へ行けるやうになるでせう。ですからね、ペートル、わるいごころをしてやらうと思つても、神様はその中からよいごころを引出して下さるので、わるいごころをした人だけが、いつまでも苦しまねばならなくなるのですよ。わたしの云つたごころが、よくわかりましたか。わかつたら、よく覚えてゐて、わるいごころをしさうになつたら、針を持つた小さな番人のごころを思ひ出して下さいよ。いつまでも覚えてゐてくれますね。」

「はい、覚えてゐます」

ペートルはまだ惜げてゐた。おぢいさんのそばには、依然としてお巡りさんがひかえてゐるから、この先きまださうなるごころやら、わからないからである。

「それ下なにもかもすみました」

おばあさまは云つた。

「それから、フランクフルトの人たちのよい思ひ出になるやうに、なにかあなたに上げたいと思ひますが、何でも欲しいものを云つてごらん下さい。何が一等欲しいの?」

ペートルは頭をあげ、目を丸くしておばあさま

の顔を見た。今の今まで、何か怖ろしいこゝが起るのだと覺悟してゐたのに、この人は、何でも欲しいものをやらうと云ふのである。ペーテルの心は、ぐる／＼渦巻きを巻きはじめた。

「ほんたうなのですよ。フランクフルトの人たちのよい思ひ出しして、又、その人たちはあなたのしたこゝをもう何とも思つてゐないといふしるしに、何でもあなたの一等欲しいものを上げるのですよ。わかつたでせう？」

もうお仕置きはないのだといふこゝを、目の前にゐるこの親切なおばあさまが、自分をお巡りさんから助けてくれたのだといふこゝが、やつ／＼今ペーテルにわかつて來た。する／＼俄かに山のやうな重荷が、すつ／＼取り除けられたやうな氣がした。それから、わるいこゝや、云ひ付けられたままで果してないこゝは、何もかも今すぐ云つてしまつた方がよいのだといふこゝまでわかつて來たので、思ひ切つて云つた。

「紙きれも失くしちやつたんです」

おばあさまは、しばらくは何のこゝやらわからなかつたが、やつ／＼電報のこゝを思ひ出し、やさしく答へた。

「よく云ひました。わるいこゝをしたなら、決して隠すではありませんよ。正直に打ち明ければ、なにもかもよくなるのですからね。それで、何が欲しいのですか」

ペーテルは、どんなものでも欲しいものももらえるのだと思ふと、もう目まひがしさうになつた。マイエンフェルトの町では、一年に一度、賑やかな市が立つて、ぎら／＼飾り立てた美しい店がならび、ペーテルはいつも、一つだつて買へる當てもないのに、何時間も立ちつくして眺めてゐたこゝを思ひ出した。財布の中には一錢銅貨が一枚しかないのに、そこに並んでゐる欲しい玩具は、みんな三錢もするからである。その中でも一等欲しいのは、可愛らしい赤い笛と、圓い柄のついたナイフだつた。あの笛を吹き鳴らして山羊ぎもを呼びあつめたら、こんなに素晴らしいだらう、だけぎ、あのナイフさへあれば、はしばみのしげみに這入つて、いろんな見事なものをこさへてやるんだがなあ……

ペーテルはそのごちらをもらはうかごなか／＼心がきまらないで、まだ考へあぐねてゐた。する／＼突然、すばらしい考へが浮んだ。あゝさうだ、

さうして來年の市までに、考へておけばいゝぢやないか。「三錢下さい」。もはや何の迷ふところもなく、元氣よくペーテルは云つた。おばあさまは笑ひ出さずにはゐられなかつた。「大して贅澤なのぞみでもないやうですね。ぢや、こゝへいらつしやい」

おばあさまは財布を出して、四枚のきら／＼光つた五十錢銀貨をペーテルの手のひらにのせてやり、なほ幾つかの銅貨をおきながら、

「すぐお勘定をして見ませうね。わたしが教へてあげませう。これはね、三錢を一年ぢうの日曜日の数だけ寄せたものですよ。ですから、これから日曜のたんびに、三錢づゝ使つていゝのですよ」
「やあ、一生だつて使へらあ」。ペーテルは無邪氣に云つた。おばあさまはこれを聞くに、又笑ひ出した。おぢいさんさぜーゼマン氏も、その笑ひ聲に何事か話をやめた。

「ほんたうにねえ、ぢや一生使へるだけあげませう。遺言状の中に書いておきませうね。ちよつと聞きましたか、あなたも書いておゝきなさいよ。

——ペーテルにはその生存中、毎日曜日に金三錢也を支給す——つて。ぜーゼマン氏はおばあさま

からさう云はれるに、うなづきながら、一緒に大笑ひした。ペーテルは手のひらのお金をもう一度ながめて、夢ではないことを確かめるに、

「ありがたいなあ」云ひ、それから、勢ひよく飛んで行つた。今度は怖さのためでなく、うれしさに飛び立つのであるから、足をすべらせるやうなことはなかつた。心配も怖れも、今はすっかり消え失せて、これから一生の間、毎日曜日に三錢がもらへるのももの。

幼稚園をり紙童話

内山 憲尙著

自序の一節

(發賣所 フレーベル館)
(定價 壹圓貳拾錢)

……紙の人形——それが、子供たちにどんなによろこびの世界を作つてゐることだらう。どんなに楽しい世界を作つてゐることだらう。私は考へた。

子供の世界は常に新しく、常に活躍し、すべてのものを生かしてゐるのに、何故に保育者たちは古いことばかりを繰り返してゐるのだらう。一枚の紙、一つの木片、それがどんなに幼児の生活を擴くことだらう。

そこで、幼児に最も親しみのある、折紙を談話の上に應用したら、又一つの新しい世界が生まれるものではないからうかと思つた。

早速、折紙を作つて園児に試みて見た、園児たちは意外によるこんでくれた。……

この序文でも解るやうに、幼稚園には本書は誠に適切なものと存じます。ぜひ皆様に御薦め致します。(編輯部)